

目次

目 桐壺帝退位。六条御息所、光源氏の愛情の薄れるのを嘆く……………	五	目 源氏と左大臣とその子息たち宮中に出仕中、葵の上急死……………	三六
目 源氏の妻葵の上妊娠。新斎院の御禊……………	八	目 葵の上を鳥野辺に葬る……………	四〇
目 葵の上、御禊見物―六条御息所と車争い……………	二一	目 服喪中の源氏と御息所とのやりとり……………	四四
目 大将光源氏、御禊の行列に登場……………	二四	目 源氏と三位の中將、亡き葵の上をしのぶ……………	四七
目 葵祭当日、源氏、紫の上と同車して見物……………	二六	目 朝顔の姫君との贈答。女房たちと物語……………	五〇
目 祭見物中、源氏、老女源典侍と歌の贈答……………	二九	目 源氏、左大臣邸を去るに当って別れを惜しむ……………	五二
目 六条御息所、車争いのあと、もの思いが強まる。出産前の葵の上、もののけ・生霊のため苦しむ……………	三三	目 残された人々の悲嘆……………	五三
目 源氏、御修法を受けるため仮住いに移った六条御息所を見舞う……………	三六	目 源氏、桐壺院・藤壺中宮に会い、二条院へ……………	五六
目 六条御息所、自分の魂が体から抜け出て葵の上を襲ったことを自覚……………	三六	目 源氏と紫の上の新枕……………	五七
目 もののけにとりつかれた葵の上の声が六条御息所の声に変わっている……………	三三	目 新婚の三日の夜の餅……………	五九
目 葵の上、源氏の長男を出産。それを聞く六条御息所は心穏かでない……………	三五	目 源氏の上への愛情……………	六二
		目 元旦、源氏、左大臣邸を訪う……………	六二

- 一 卷名は源典侍の歌「はかなしや人のかざせるあふひゆへ神のゆるしの今日を待ちける」および源氏の歌（P21）による。前巻花宴巻で源氏二十歳、一年の空白を置いて、この巻で二十二歳とする本居宣長説（玉の小櫛）が一般に用いられている。
- 二 桐壺院から朱雀帝へ譲位のあったことをいう。花宴巻とこの巻の間に、讓位、藤壺腹皇子の立坊、齋院齋宮の卜定、光源氏の大將昇進などが行われたことが既定の事実として物語は進行していく。
- 三 （主人公光源氏は）御身分の高さも加わったからだろうか。P63行目に「大將の君」とあり、花宴巻までの中將から昇進したことがわかる。
- 四 このあたりの表現は「われを思ふ人を思はぬ報いにやわが思ふ人の我を思はぬ」（古今集・巻十九・よみ人しらず）によるか。
- 五 源氏の父桐壺帝の中宮藤壺。帝が退位された今は在位中以上にびつたりと臣下の夫婦のように寄り添っておられるのを。
- 七 皇太后になった朱雀帝の母弘徽殿。

葵

目 世の中かはりて後、よろづもの憂くおぼされ、御身のやむごとなさも添ふにや、軽々しき御しのびありき

もつつましようて、ここもかしこもおぼつかなさの嘆きを重ね給ふ報いにや、なほ我につれなき人の御心をつきせずのみおぼし嘆く。今はましてひまなうただ人のやうにて添ひおはしますを、今後は心やましようおぼすにや、内裏にのみさぶらひ給へば、立ち並ぶ人なう、心やすげなり。折ふしにしたがひては、御遊びなどを好ましよう、世の響くばかりせさせ給ひつつ、今の御ありさま

- 一 皇太子。藤壺腹の桐壺院第十皇子。実は光源氏の子。後の冷泉院。
 二 春宮の後見役をつとめる有力者がいないことを気がかりにお思い申して。
 三 光源氏。花宴巻で宰相中将であったが、右大将になつてゐる。
 四 話の途中で思い出した、という感で、話題を転換することば。
 五 夕顔巻に「六条わたりの御忍びありき」とあつた、光源氏の恋人のひとり。「御息所」は、天皇、皇太子の妃。
 六 前春宮坊、つまり前皇太子。六条御息所の夫の「前坊」は賢木巻の説明によると、皇太子であつた時期が、朱雀帝の皇太子の時期と重なるので「前坊」ではなく「先坊」とする説もある。
 七 伊勢皇太神宮に奉仕する未婚の内親王、または女王。新帝の即位によつて新斎宮が卜定される。
 八 娘の斎宮といつしよにいつそ伊勢に下つてしまおうかと。
 九 退位した桐壺帝が「院」と呼ばれる。
 一〇 亡くなつた、六条御息所の夫前坊。
 一一 伝聞の助動詞「なり」。
 一二 自分(桐壺院)の皇女たちと同列に。

- 一 気ままにこのような浮気をするのは。
 二 源氏御自身の気持でも。
 三 相手の女性に恥をかかせるようなことをせず。
 四 どの人にも不満のないように扱つて。
 五 女から恨まれるようなことをなさるな。「源へ父帝の御教訓也」(岷江入楚)。
 六 とんでもない、だいそれた自分の心を「藤壺の中宮にまゐりかよひ給ひし事也」(花鳥余情)。
 七 お聞きつけになつたとしたら、その時は。
 八 父院にもお聞きになり、忠告なさるのに。
 九 御息所の御名譽のためにも、自分のためにも、好色めいていて、
 一〇 いったいどうおけない、お気の毒な方とはお思い申していらつしやるけれど。

しもめでたし。ただ、春宮をぞいと恋しう思ひきこえ給ふ。御うしろみのなきを、うしろめたう思ひきこえて、大将の君によるづきこえつけ給ふもかたはらいたきものから、うれしとおぼす。

まことや、かの六条の御息所の御腹の前坊のひめ君、斎宮に給ひにしかば、大将の御心ばへもいと頼もしげなきを、幼き御有様のうしろめたさにことつけて下りやしなましと、かねてよりおぼしけり。院にもかかることなむときこしめして、故宮のいとやむごとなくおぼし、時めかし給ひしものを、軽々しうおしなべたるさまにもてなすなるが、いとほしきこと。斎宮をも御子たちのつらになむ思へば、いづかたにつけても

ろかならざらむこそよからめ。心のすさびにまかせて、かくすきわざするは、いと世のもどき負ひぬべきことなり」など、御けしきあしければ、わが御こちにもげにと思ひ知らるれば、かしこまりてさぶらひ給ふ。一人のため恥がましき事なく、いづれをもなだらかにもてなして、女のうらみな負ひそ」とのたまはするにも、けしからぬ心のおほけなきをきこしめしつけたらむ時と、恐ろしければ、かしこまりてまかで給ひぬ。また、かく院にもきこしめしのたまはするに、人の御名も我ためもすきがましう、いとほしきに、いとどやむごとなく、心苦しき筋には思ひきこえ給へど、まだあらはれてはわざともてなしきこえ給はず。女も似げなき